

教えの庭から

戦後、日本では公教育の場では宗教を一切教えてはいけないということになっていました。だから、戦後の教育を受けた私たち世代では、すべてのものを個々の物質に分析して捉える「物質科学主義」によって育てられてきました。だから、阿弥陀様や観音様など目に見えないものは、存在が確認できないので、認められないのです。宗教は、迷信のようなものだと思われきました。

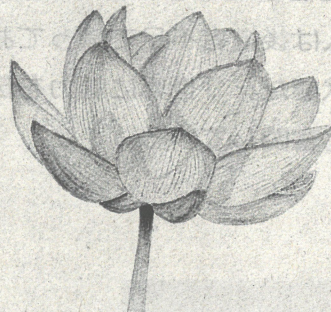
お寺に育った私は、そのことに悩まされていましたが、理系の科目が好きだったので、大学では、物理学を学びました。大学院を修了後は、大学の教員として物理学の教育と研究をしてきました。しかし、宗教と科学の対立については、自分の中で解決をされずに悩

いのちの教え

出雲市斐川町・仁照寺住職 江角 弘道

みを持っていました。「寺に生まれて跡継ぎをするのえに近いと考えています。現在でも、このように理学などを研究しているのか」という質問を、ご縁のある方から頂きましたが、その当時は質問にうまく答

成11)年12月26日、大学生



挿絵 平尾恵郷

えられず、お茶を濁していました。当時を振り返ってみると、世間の風潮と同じく、科学と宗教は、正対抗の物語で、娘も含め3人の女子学生が即死しました。娘真理子(20歳)が、突然

族一同、深刻に悩みました。そして、「娘は死んでどこにいったのだろう」という問いの答えを求めるようになりました。この問いに対して心から納得する答えは、物理学からは出てきません。毎朝、お仏壇の前で念仏し、そして般若心経・観音経を読経していますが、娘の死後、1年ほどたった頃、子供の頃から慣れ親しんでいた般若心経の一節「色即空 空即是色」が突然、心に湧き上がってきました。「存在するものはみな空なり」と教えるこのお経の中の「空」ということが、鮮明にイメージできるようになってきたのです。それは、私と妻が結婚する前には、娘はいませんでした(無・空といえる)。結婚後に生まれ、私たちと20年間暮らししました(色・目に見える形のあるもの)。そして亡くなりました(無は、亡びていません。仏教・空といえる)。この経過は、「いのち」が空から生

まれてきて色となり(空即色)、また空に帰って行くことを示しています(色即空)。このことから、仏教は、「いのちの教え」だと確信しました。宇宙物理学は、命の根源は、138億年前のビッグバンで生じた光であると解明しています。光から対生成で素粒子が生成されます。その素粒子からさまざまな物質が生成されて、40億年前に地球上で、あり得ないほどの確率で生命体が生まれました。その生命体が進化して人類が生まれ現在に至っています。物理学は、無限の命のバトンタッチがあつて、現在の人の命があることを教えてくれますが、死んだ後にその命について示しません。死してなお人の心に、鮮やかにその姿かたちが残る時、その人間の「いのち」というものは、亡びていません。仏教は、死を新たな生の始まりと見ています。